人間として生きる喜びを感じて【よりよく生きる喜びD(22)】

関　寛斎

「世のため人のために汗を流してこそ、人間としての生き方である。」

これは、この物語の主人公、関寛斎の生涯を支えた言葉です。寛斎は、北海道で最も寒さの厳しい陸別町に、全ての人が平等に暮らせる*理想郷の建設を目指し、開拓に身を捧げました。

【関　寛斎の写真】

寛斎は、一八三〇年、現在の千葉県東金市に生まれました。寛斎が生まれた地域は、百姓として生活する者が多く、人々の暮らしは決して豊かとは言えませんでした。幼くして母親をなくし、百姓であり*儒学者でもあった関俊輔に養子として引き渡された寛斎は、俊輔が開く私塾「製錦堂」に通いながら勉学に励み、勤勉、倹約、質素など、あらゆる苦難に耐えられるように育てられていました。

十九歳になった寛斎は、千葉県佐倉市にある*蘭医学塾の佐倉順天堂に入門し、佐藤泰然から医学を学びました。ここで寛斎は、医学とともに「医をもって人を救い、世を救う」という教えを学びます。

一八五二年、順天堂で医学の学びを終えた寛斎は、東金市へ帰郷し、「養成所」という仮の医院を開業しました。その年の十二月、寛斎は俊輔の本家である君塚家の次女、君塚アイと結婚します。寛斎二十三歳、アイ十八歳のことでした。

それから約四十年の間に、寛斎は徳島県に移住し、アイとの間に八男四女をもうけ、医者としては「医をもって人を救い、世を救う」という教えのもと、多くの命を救いました。

一八九一年、六十一歳になった寛斎は、医者としての自分に限界を感じていました。このころの日本は、江戸幕府から明治政府へと政権が移り、士農工商の身分制度が撤廃されて約二十年が立ちましたが、依然として貧富の差が残っており、貧しい者は十分な医療を受けられず、次々に命を落としていたのです。そのため、寛斎は貧しい者からは一切お金を受け取らず、医療を施していました。

「このような貧富の差があってはならない。医者として患者を診ながら、貧しい者たちに腹一杯食べさせてあげられるような、みんなが平等に生きられる理想郷を作りたい。」

いつしか、寛斎はそのような思いをもつようになっていました。そんな時、*依田勉三率いる晩成社の移民団が、北海道十勝の開拓に乗り出し、集団移住したという情報が寛

斎に届きます。寛斎は、胸の中で何かが弾けたような気がしました。

「北海道か。真っさらな未開の地こそ、理想郷を作るのにふさわしい。」

そう考えた寛斎は、一九〇二年、アイや、多くの*入植者と供に、開拓が始まったばかりの北海道陸別へと向かうのでした。寛斎が七十二歳のことでした。

陸別での開拓は、苦労の連続でした。夏は三十度を超える猛暑、冬は氷点下三十度を下回る寒さが、寛斎たちを苦しめました。荒れ果てた地を開墾し、やっとの思いで育てた作物には、大量のバッタなど害虫が押し寄せ、それらを食い荒らしていきました。高齢の寛斎にとって、何度も続く開墾作業は非常に辛く厳しいものでした。それでも、寛斎は、作物が育ってくると、自分の子供が育つように可愛く、愛おしくなることに喜びを感じていました。自然との関わりの中で、苦労と喜びが絶えず入り交じり、あっという間に一年が過ぎていく。そんな生き方を「人間らしい」とさえ感じるようになっていました。

こうした努力が実り、開拓は二十ヘクタールの開墾地、牛十頭、馬九十五頭を飼育する農場を築くまで広がりました。

一九〇四年、寛斎のもとに、電報が届きます。陸別から離れ、体の静養のため札幌に住んでいたアイが、亡くなったというのです。それを聞いた寛斎は、目の前が真っ白になり、その場に崩れ落ちました。

「なんで、お前は・・・わしを残して一人で・・・」

妻アイの死は、寛斎を打ちのめしました。

「わしが無償で貧しい者へ医療活動をしていたときも、貧乏のどん底にありながら愚痴一つこぼさず、ついてきてくれた。わしは、アイの支えがあったからこそ、頑張ることができたのだ。徳島から北海道へ来て、慣れない土地と重なる心労が、アイの体を弱らせたのだ。アイ、すまない・・・。」

寛斎は、どんなに体が痛くて辛いときも開墾作業を止めませんでしたが、アイが亡くなってからは、仕事をする気力が全く湧きませんでした。何も手が付かなくなり、自分の食べる朝昼晩の食事さえどうでもよくなって、生きていることすら、うっとうしくなっていたのです。

そんな寛斎の様子を心配した三男の餘作が、寛斎の心の気休めになるだろうと考え、寛斎が尊敬する二宮尊親に会わせる手はずを整えていました。

二宮尊親は、一八九七年、福島県から開拓団を率いて十勝の豊頃に入植し、*報徳の精神のもと、大農場を築き上げた、いわば開拓の大先輩でした。

一九〇五年七月、寛斎は、豊頃の地に一面に広がる美しい

黄金色の畑を目の当たりにしました。そこには、麦やトウキビが豊かに実っていたのです。

「ここが、二宮農場だ！二宮一行が拓いた二宮農場だ！」

寛斎は、ここに辿り着くまでの険しい道のりの疲れが、一気に吹き飛んだ気がしました。

農場には、農夫たちが住む何軒かの家が建ち並び，その奥まったところの小さな家に、尊親はいました。

「あなたが、関先生ですか。お初にお目にかかります。よく訪ねてくださいました。」

寛斎は、尊親から農場を開拓するまでの話を聞きました。

「ここに入植した方々が山野を切り開き、熱心に開墾した成果がやっと現れました。自作農を育てる。これが私の昔からの夢でしてね。ここにいる者たちは、みな、自分の畑がもてることを誇りに思い、がんばっています。そして、お互いに助け合う心を大切にしていますので、冷害で作物ができないときも、お互いに支え合い、逃げ出す人はいません。これは、私の誇りです。」

寛斎は、尊親の言葉から、アイを亡くして消沈していた心に、再び湧き上がる何かを感じました。目の当たりにした農場の姿は、寛斎が目指していた理想郷の姿と同じだったのです。

「ずっと考えていたわしの理想は、間違っていなかった！これから、みなと共に、陸別に理想の地を築いてみせるぞ！アイ、見ていてくれ。」

寛斎は、黄金色に輝く畑を眺めながら、目を細めました。

その後、陸別に戻った寛斎は、三男の餘作、四男の又一らとともに、約五百五十三ヘクタールの開墾地、牛九十六頭、馬百八十頭を飼育する大規模な農・牧場を築きあげました。

「人とはな、他の人たちから必要とされていると実感したとき、生き甲斐が生まれるのだ。」

これは、八十三歳になった寛斎が亡くなる三日前、家族に残した言葉だと言われています。

＊理想郷・・・理想的な世界
＊儒学・・・古代中国の思想をもとにした学問
＊蘭医学・・・オランダ医学
＊依田勉三・・・帯広市の開拓に携わった中心人物
＊入植・・・開拓地などに入って生活すること
＊報徳の精神・・・私利私欲に走るのではなく、社会に貢献すればいずれ自分に還ってくるという考え方

【関　寛斎が拓いた農場の写真】

◎　なぜ、寛斎は医者としての自分に限界を感じていたのでしょうか。
◆　あなたにとって、「よりよい生き方」とはどのようなものですか。